

「今月も疲れたなあ…」

今月も1ヶ月乗り切った私はご褒美としていつものスパを予約していた。いつも指名をしている人がいるのだが、施術中にその人とお話をして気づいたら寝落ちをしている。それもなんだか心地よくてついつい通ってしまっているのだ。今日もご褒美としてそのスパに向かう。

心を弾ませながらいつものドアを開けると、今まで見たことない新人さんらしき男性のスタッフさんが受付をしてくれた。

「今日予約している小柳なんです…」

「あ、かしこまりました！少々お待ちください…」

パソコンに顔を近づけて必死に画面をスクロールしている。私の名前を見つけたのかハッとした表情を浮かべたが、すぐ顔が曇っていった。

「あのー…、すみません、いつも指名されている加藤が本日急遽お休みでして…」

「あ、そうなんですね…」

新人くんがすごい気まずそうに私に告げてきた。どうしようという表情をお互い浮かべていて少し気まずい時間が

流れる。

「他のスタッフさんとかいらっしゃいますか…？」

「そうですね！少々お待ちください…すみません、要領悪くて…」

「とんでもないですよ、全然ゆっくりで大丈夫です」

ちょうどうちの会社でも新卒が入ってきてたなと考えながら、慣れていなさそうなパソコンの操作が終わるのを待った。ふわふわで少しパーマがかっているような髪型でワンちゃんみたいで可愛いなと呑気に思っていた。

「…あ、当店で女性に人気のスタッフがキャンセルで空いております！そのスタッフが代わりに施術させていただいてもよろしいでしょうか…」

「もちろん、大丈夫ですよ。ありがとうございます」

「すみません、お時間いただいちゃって…そちらでおかけになってお待ちください！」

男の子はそう言うスタッフルームのようなところにパタパタと向かっていった。一生懸命で可愛いなと思いながら待合室のベンチに座ってスマホを開いてSNSをチェックする。

指を動かしてスクロールしていくと個室スパを題材にした漫画が流れてきた。タイムリーだなと思いながらその漫

画を読んでいく。途中までは普通の漫画だったが、下半身のオイルマッサージに入ると少し雰囲気に変化し、際どい場所を触っていた。主人公は疑問を抱くが、これも施術だというスタッフの言葉を信じてそのままエッチな展開になっていくというものだった。しばらく彼氏がおらず、こういう経験を久しくしていない私にとっては刺激が強かったが、少し先が気になる私がおりスクロールの指を止められなかった。

「…小柳さん？お待たせいたしました、本日急遽施術させていただきます阿久津です」

「ひゃあっ！」

「わ、驚かせてしまってすみません」

エッチな漫画を読んでいたという恥ずかしさから変な声を出してしまい、スマホをぎゅっと握った。顔を上げると体格の良い男の人が私に向かって声をかけていた。女性に人気のスタッフだと聞いていたためにつきり同じ女性だと思っていたが、まさかの男性だったらしい。

（男性だったんだ…できれば女性がよかったけれど今から言うのも気まずいしつか…ていうか、漫画の画面見られてないかな…さすがに人のスマホ見たりしないか…）

「あ、阿久津さん…こちらこそ勝手に驚いてしまってすみ

ません…よろしく願います」

「すみません、お待たせしました。こちらどうぞ」

案内された部屋へと進んでいくといつも施術を受けている部屋よりさらに奥の部屋に通された。初めての部屋だなぁなんて思いながら、準備されている施術着に着替える。ビキニのようなものに着替えてうつ伏せでタオルをかけてスタッフを待った。ドアをノックする音が聞こえるとさっきの阿久津さんが入ってきた。

「本日は急遽変更してしまいすみませんでした。お詫びにオイルマッサージをプラスさせていただきますね」

「あ、ありがとうございます…」

オイルマッサージと聞いて先ほど読んでいた漫画を思い出し、少しお腹がむず痒くなってしまう。

「それでは初めていきますね、この部屋は防音の個室になりますので少し声を出しても大丈夫ですよ」

「は、はい…」

「それに、自分で言うのもなんですが私は当店で女性に1番人気のスタッフですのでご安心ください」

(声を出してもいいって寝落ちしちゃっていびきをかいても大丈夫ですよって意味だよね…？ダメだ、さっきのえっ

ちな漫画に氣を取られすぎてる…)

背中に温かいオイルが垂らされると腰から背中へとオイルを広げていった。力加減がちょうど良く、程よい指圧を感じながらじんわりと熱が広がっていく感覚が気持ちいい。はじめに変な疑いをしてしまったことが申し訳なく感じるほどであった。

「力加減大丈夫ですか？」

「はいっ！気持ちいいです…」

「ふふ、よかったです」

体格の良い男性だが、柔らかい声で笑うそのギャップに少しキュンとしてしまう。

「結構ふくらはぎ張ってますね？結構歩くことが多いですか？」

「あー…、駅から家までの道で坂が多いからだと思います」

「そうなんですね…、坂はきついんですよね。太ももと一緒によくほぐしておきますよ」

そう言いながらふくらはぎから太ももにかけて温かいオイルをたら一と垂らしていく。上手く広がってくれるが、太もも付近に垂らしたオイルが内腿に入っていき、秘部ま

で垂れてきてしまった。

「っん…」

「…何かありましたらおっしゃってくださいね」

「すみません、はいっ…」

普段の生活では感じる事のない場所で感じる温かさに思わず声が出てしまい、恥ずかしくなってしまう。それでも阿久津さんは淡々と施術を行なっていく。太もものオイルを広げようと内腿に手が滑り込んできた。ビキニを着ているとはいえ、少し際どいところに手が伸び、たまに親指がおまんこの周りのお肉に当たってしまう。

（さっきからちょっと恥ずかしい部分に当たってるけど、これは普通なのかな…。でも女性に1番人気って言ってたし普通なのかな…）

「ここのリンパ節のところをほぐしていくと太ももとふくらはぎどちらもほぐせますので」

「っん、はい…」

脚の付け根からにゆるつと彼の手が内腿の肉をかき分けて侵入してくる。オイルで勢いよく滑ってしまい爪がクリをカリッ♡と擦ってしまっていた。

にゆる♡カリッ…♡

「ひうッ…」

「喉からでもいいので声を出すことで疲労感も吹き飛びますからね、声出してもいいですよ」

「え…？」

にゆる…♡カリカリカリッ♡♡

さっきより速いスピードで脚の付け根からクリまで指を滑らせたと思ったら、今度は何回も爪でクリを上下にたくさんカリカリされてしまう♡突然与えられたたくさんの気持ちよさに思わず身体がびくっ♡と動いてしまっていた♡

「ひゃうッ?!♡♡」

「うん、いいですね」

「ちょ♡変なところ当たってます…んッ♡」

「変…？女性の身体に変なところなんて無いですよ、すべての身体の部位は疲労感を無くして気持ち良くなるためにあるんですから♡」

（これが本当に施術なの…？♡なんかさっき読んだ漫画に似たシチュエーションになってしまってる気がする…♡）

カリカリカリッ♡♡

「っん♡」

「あなたはここもあまりほぐされて無いですね？♡ここが凝り固まってしまうと女性ホルモンが上手に働いてくれないんです♡」

「へっ？♡こ、これも施術なんですかっ?!♡」

「当たり前じゃないですか♡それでは、仰向けになってください♡」

彼に強引に仰向けにされると、脚をガバッと開かれてしまった。仰向けの時に垂らされたオイルでビキニの前側も少し透けてしまっている。彼はそこに顔を近づけるとスンスンと匂いを嗅いでいた。

「ひゃっ♡ちょっとお♡」

「これもあなたの身体の状態を見るためです♡先ほどのマッサージだけでもおまんこから少し愛液が出てしまっているようですので、ここはしばらくほぐせていないですね？♡」

「なんでそんなことっ…」

「私には全てわかりますよ♡このままでは十分にマッサージできないので下のビキニは取らせていただきますね♡」

有無を言わず下のビキニがスルッと脱がされると、オイルを下腹部から秘部にかけて垂らしてきた。ツーっとク



りの方をかすめていくのが少しもどかしい。そのもどかしさを感じ取ったのか、クリの上に指を置いてきた♡

「まずは1本でじっくりほぐしていきますね♡」

ぴんっ♡カリカリカリ♡

「ひうっ♡」

1本の指でクリを弾いた後にカリカリ♡と爪でクリを刺激してきた♡脚をガバッと開いた状態にされて触られており、脚を閉じて抵抗しようにも身体が脱力してしまって脚を閉じられない。

「うん、いいですね♡じゃあ2本にしましょうか♡」

ぴんっ♡くちゅくちゅ♡♡

今度はクリを弾いた後にオイルで滑りやすくなった人差し指と中指で上下にクリを擦ってきた♡くちゅくちゅ♡と垂らされたオイルが恥ずかしい音を立ててくる♡

「っあ♡ふーっ♡♡」

「声我慢なくていいって言ってるのに♡出したほうが疲労感取れますよ？♡」

「そんなぁ♡恥ずかしいです…っ♡」

「じゃあ声を出さざるを得ないような気持ちよさを与えればいいですね？♡」

「へ…？♡」

くちゅ…♡れろれろれろれろ♡♡♡

施術台の横にいる彼の顔が秘部に近づいてきたと思ったら、柔らかく温かい舌でクリを上下左右にれろれろ舐めていじめてきた♡

「んあッ?!♡ひうッ〜〜〜♡♡♡♡♡」

「ふふ、やっと大きい声出たね♡」

れろれろれろれろ♡♡♡ぢゅる♡ぢゅるるるる♡♡♡  
♡♡

「おおッ♡やめッ♡ッあ〜〜♡♡クリ吸われてるうッ♡♡♡」

(クリ舐められたと思ったら次は吸われちゃった♡吸われるのってこんなに気持ちいいの?!♡こんな刺激初めてで我慢してるのに声出ちゃうッ♡)

「吸われるの好きなんだ♡あ、クリぷっくりしてきてもっ

と吸って欲しいって主張してますね♡これはもっところを  
ほぐして欲しいという身体の自然な反応なんですよ？♡」

ぢゆる♡ぢゆるるるるる♡♡♡♡♡♡

「ひぐうッ♡♡ああッ♡そんなッ?!♡吸われてるうッ♡  
♡くりい♡♡♡」

「やはりしばらくほぐせてないので、とっても凝ってます  
ね…♡」

「そんなあッ♡んあッ♡♡」

ぶちゅ♡こりこりこりこり♡♡

「ひうッ♡なんかッ♡だめえ♡♡へんッ♡きもちいのの  
ぼってくるッ♡」

「もしかしてもうイッちゃいそうですか？そうですね、一  
度イッてしまえば次の箇所の施術に入れるので一度イッて  
みますか？♡」

「え…ッ？♡」

（私元カレとのえっちでちゃんとイッたことないからわか  
んないかも…♡イクってどんな感じなんだろう…♡）

「じゃあイッてみましょうか♡ぶちゅって潰したクリをぢ  
ゆるぢゆるたくさん吸ってあげます♡」

「へっ♡へん、なるっ♡♡」

軽く手で抵抗するも体格の良い男性に敵うはずがなく、  
再び彼の顔が秘部に近づいてきた♡

ぶちゅ♡こりこりこりこり♡♡

「ひいっ♡♡んあああゝ♡♡きもちっ♡♡」

「ふふ、我慢してかわいいですね♡」

ぢゅるるるるるるる♡♡♡♡

「ひぐっ♡♡ううゝ♡♡♡イッちゃう!?♡♡やあああゝ  
ゝ♡♡♡♡♡♡」

びくんッッッ♡♡

びくん♡と大きく身体を跳ねさせてイッてしまった♡ク  
リを潰されてぢゅるぢゅる吸われるだけでなく、上下左右  
にこりこり♡されてしまい予想外の気持ちよさに頭からつ  
ま先まで甘い電流が流れたようだった♡

「ふふ、今日顔を合わせたばかりのセラピストの前でイッ  
ちゃいましたね♡」

「ううッ♡」

「それでは次の施術に入りますね…佐野くん、入っていいよ」

部屋の外に声をかけるとドアが開き、男性が入ってきた。股をガバッと開いてしまっている恥ずかしい姿を見られてしまい、咄嗟に脚を閉じようとするが阿久津さんによって開いている脚を固定され動くことができなかった♡

「し、失礼します…」

「佐野くんは新人くんなんですが、あと少しで独り立ちできるんです。勉強したいとのことで…ご協力お願いします♡」

「そんな、恥ずかしいですって…♡って、もしかして受付にいた…？」

うまく定まらない視線の目の前にいた男の子は受付にいた男の子だった。佐野くんと呼ばれるその子は阿久津さんとは真逆の体格で痩せ型であり、対極的な2人の男性が並んでいた。

（よりもよってさっき可愛いなどと思ってしまった男の子にこんな姿見られて恥ずかしい♡）

「それじゃあ、まだほぐしてないところしっかりほぐしていきますね♡」

阿久津さんはそう言うと、受付の子におまんこを見せるような形で私の足をガバッと開いて愛液がダラダラ垂れてしまっているおまんこの中にゆるっ♡と指を1本挿れてきた♡1本だけだけれども肉壁を掻き分けるようにうねうね動いている指はクリとはまた違う快感を与えてくる♡

にゆる♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡

「ひうッ♡ゆびい…♡うねうねしてるッ♡やだぁッ♡みないでえ…♡♡」

「恥ずかしそうですね♡先ほどイッたばかりなので中とてもキツくなってますよ♡ほぐしがいがあります♡」

とん♡とん♡こりこり♡ごりごり♡

「んあッ?!♡♡」

「こうやって指で入り口のごつごつした部分を刺激してあげると気持ちよくておまんこの中がほぐれてくれるんだよ♡」

「うあッ♡♡♡そこ、だめッ♡♡んお♡♡」

おまんこの入り口付近にあるごつごつとしたGスポットを男性の太い指で刺激されてしまい、気持ちよさで再び目がチカチカしてしまう♡恥ずかしさで顔を背けるが、背け

た先に真剣な眼差しで私を見る佐野くんがおり、余計に恥ずかしくなってしまう♡

「女性にとって大事な場所ですからね♡こうやって声も出してもらってほぐしたほうがいいですよ♡」

「そん、なあ♡♡んッ♡♡♡でもお♡指でたくさんおまんこごりごりされてえ♡きもちッ♡♡♡」

ごりごり♡ごりごり♡ごりごり♡ぴちゃ♡ぴちゃ♡

「まだきついですが早く気持ち良くなって欲しいので2本に増やしますね♡」

にゅぷ♡とん♡とん♡ごりごり♡

「んああ♡また入ってきたああ♡♡」

「佐野くん、女性のペースに合わせるのも大事だけどある程度はこちらでリードして大丈夫だからね」

「はい！」

(おまんこ責められて身体くねらせてるようなところ見られたくないよお…♡でも気持ちよくて抵抗できない♡)

ごりごり♡ごりごり♡ぴちゃ♡ぴちゃ♡

「ひゃう♡なんかッ…♡出ちゃいそうッ?!♡♡♡」

「そのまま出していいですよ♡」

指で責められているおまんこからぴちゃぴちゃ♡と卑猥な音が大きくなってきた♡

ぴちゃ♡ぴちゃ♡ごりごり♡ごりごり♡

「んあッ♡♡♡ひぐうう♡♡♡♡なんかあ♡♡♡へんッ♡♡♡♡」

「そのままごつごつしたところ触ってあげますよ♡ほら潮出しちゃってください♡」

ごりごり♡ぷしゅッ♡ぷしゃああああああ♡♡♡♡♡

2本の指で責められたおまんこは再びイッてしまい、ぷしゃあ♡♡と派手に潮吹きしてしまいシーツを汚してしまった♡シーツが濡れている感覚をお尻で感じてさらに恥ずかしさが増してしまう♡

「たくさん水分出せましたね♡水分を身体の中に貯めてしまおうとむくみやすかったりしますからね♡いい調子です♡」

「ひぐう…♡♡」

「こうやって、潮吹きさせられたら大丈夫だね♡じゃあ、



次佐野くんやってみようか」

「わかりました！」

元気いっぱいの返事をした佐野くんは私に近づくと、イッたばかりのおまんこの中ににゅぷ♡と指を挿れてきた♡今度は浅いところではなく奥の方をごりごり♡と指で強く刺激してきた♡今までずっと浅いところを責められていたので、いきなり与えられた深い場所での快感にびくん♡と身体を小さく跳ねさせてしまう♡

にゅぷ♡ごりごり♡ぴちゃぴちゃ♡

「イッたばかりいいいい?!♡♡なののおお♡♡♡♡」

「こうですかね…?♡」

「うん、こうやってイッた後すぐに刺激してあげることも大事だね♡」

「おくッ♡きてるの〜〜ッ♡♡♡」

「僕経験が少なくてわからないんですが、たしかここが気持ちいいですね…?♡」

「んああッ♡うんッ♡きもちいい♡♡」

阿久津さんはピンポイントでとっても気持ちいいところを責めてくれてすぐイッちゃうけれど、佐野くんには今まで刺激されてこなかった気持ちいいところをゆっくり責められてしまう♡なので、イキたいのにイケない♡

(こっちがもっと欲しいって言わないとイカせてもらえなさそう…♡でも、自分から言うなんて…♡)

「気持ちいいところを責められてるのにイケないのはもどかしいですね♡おねだりできるようになるまで我慢してみましようか♡」

「んあッ♡おねだりなんてッ…♡ひぐううう♡♡♡♡」

ごりごり♡ごりごり♡ごりごり♡

「ひゃッ♡♡ゆびい♡まだおくごりごりしてりゅッ♡♡んん♡♡♡」

先ほどまで真剣な眼差しで目の前に立っていた子に2回もイッたおまんこを指でいじめられているんだと思うと恥ずかしいが、わんこのようなふわふわした髪型をしている子がこんなに気持ちいいところを責めるのが上手だなんて思わず、そのギャップで自然におまんこがきゅん♡となってしまう♡

(さっきイッたばかりなのにもうイキたいッ♡おねだりなんて恥ずかしいけれど…♡でも、もっと気持ちよくなりたいッ♡)

こりこり♡ぴんッ♡

「ああ♡♡♡ちくびいッ?!♡♡んあ♡♡♡♡」

「まだおねだり出来なさそうなのでもっとイキたくなるように乳首もほぐしてあげます♡」

気持ちよくなりたいという欲求に負けそうになった時、後ろから手が伸びてきたと思ったら阿久津さんにあらわになった乳首をこりこり♡された♡温かいオイルがおっぱいと乳首にまわりつき、指を滑らせるように刺激してきた♡

ごりごり♡ぴんッ♡こりこり♡

「ひぐう♡♡んあああ♡♡♡ぜんぶ、きもちッ?!♡♡♡♡♡」

「乳首もおまんこも一緒にほぐされて気持ちいですね♡」

(同時にいじめられて気持ちいいんだけどイケないのがもどかしい…♡もう早くイキたい♡)

「もっとお…♡くださいッ…♡♡♡またイキたいですッ♡♡♡」

「やっと素直になりましたね♡佐野くん、もうちょっと早くしてみて♡」

ごりごり♡とんとんとん♡♡♡

「ひゃうッ♡♡ううッ♡♡♡はやくなったああゝ♡♡  
♡んお〜〜ッ♡♡♡♡」

「もっと日頃の疲れを癒して欲しいです…♡」

無邪気な笑顔とは裏腹に佐野くんのおまんこを責めるスピードが早くなる♡イケそうでイケなかった気持ちよさを与えてくるさっきの感覚とはまるっきり異なる気持ちよさですぐにイキそうになる♡

ごりごり♡とんとんとん♡♡♡

「ひぐッ♡♡♡イッちやいそうゝ♡♡♡♡んあッ♡♡♡  
♡」

「乳首もこりこりできるくらい硬くなってるよ♡」

「こっちも中から愛液が溢れてきてます…♡」

「んあ〜〜ッ♡♡♡イッちや、うゝ♡♡♡イグッ♡♡♡  
♡」

ごりごり♡とんとんとん♡♡♡こりこり♡

おまんこを責められながら乳首をこりこりされて呆気なくイッてしまった♡再び身体をびくん♡と大きく跳ねさせ

たが、熱を帯びた身体はまだ火照ってしまっていた。

「いい調子ですね♡それでは次の施術を行いますので、四つん這いの体勢になっていただきます♡」

そう言われまだしっかり力を入れられない身体を無理に起こし、なんとか四つん這いの体勢になった。ふと顔を上げると目の前に佐野くんがいた。てっきり阿久津さんだと思ったがどうやら違ったらしい。

「それでは私たちがじっくりほぐした身体の仕上げをしていきたいと思います…♡」

(仕上げってことはもう施術は最後になるのかな…？さっき何回もイッちゃって恥ずかしかったのに、まだ気持ちよくなりたい自分がある…♡)

にゅぷぷぷ…♡

「っひゃあ♡おちんちはいつてきたあ…ッ?!♡♡♡」

「そうです♡ほぐして濡れ濡れになったおまんこの中におちんちんを入れてさらに身体の芯にまでアプローチしていきます♡まずはおちんちんの形をあなたのおまんこに覚えてもらうために入れて少し待ちますね♡」